

私と治験の経験をお話します。

単身赴任で過ごしていた熊本県での2年目の秋ごろ、明らかに咳が増え、年明けには自分でも「可笑しいな。」と思うほど咳き込むようになりました。年度末に人間ドック健診を受ける機会があり、問診でも咳について相談をしていました。診断結果は、次の単身先の広島県に届く手続きをしており、受け取った受診結果を確認したところ、直ぐに受診結果について医師の診察を受けるようにと記載されていました。職場に近い広島の病院を受診したところ、色々な検査に廻され不安が募りました。

検査後、直ぐに入院の指示。入院初日に告げられた病名は「肺腺癌でステージ3B」でした。よく聞く「肺癌」で無く「肺腺癌」、リンパ節にも転移をしているから「3B」、知らない言葉だらけ。余命も伝えられ、家族を直ぐに呼ぶように言われましたが、自分なりに動搖していたと思います。改めて家族はいつ来るのかと聞かれ、妻が慌てて福岡からきました。その頃、下の子は小学校低学年。不安ではありましたが、とにかく頑張ろうと。

抗がん剤治療を開始して初期治療を終えたところで、自宅がある福岡の九州がんセンターに転院することになりました。「呼吸器腫瘍科の瀬戸先生が勤務されているから。」と強く勧められ、「その病院しかありえないです。」と伝えられたのを覚えています。

初めの抗がん剤の効果は1年程で表れなくなり、次の抗がん剤に変えて2回目の治療も副作用がきつく、頑張りましたが、助かるのかなと不安ばかりでした。新聞やネットで調べたり、人づてに聞いたりして、治療途中ではありましたが著名人も治療する保険適用も無い民間療法の放射線治療を受けることを瀬戸先生にも相談しました。患者はみな同じ意見を持っていると思いますが、治療方法が代わったりすると、治療中の先生と疎遠になったり、戻ってくることを拒否されることに不安になります。瀬戸先生は、放射線治療後の副作用について、保険適用では無いことの覚悟を教えてくれ、終わりに「いつでも帰って来て放射線の経過を報告して。僕の患者だから。」と。診察室から出て廊下で泣きました。

意を決して、放射線治療を続けたものの、徐々に治療期間後には効果が表れなくなり心配していた頃、瀬戸先生から「日本人向けの新しい薬の第1相治験が九州がんセンターでも始まりそう。効果はまだわからないけど参加してみない?」と声をかけてもらい、治験が始まる平成28年3月を待ちました。

治験に参加するにあたり、自分なりに心に決めたことがありました。「参加する以上自分は必ず治る、生きる、諦めない、今までの抗がん剤や放射線治療のように自分で判断しない、

この薬の効果が表れた場合、同じ病気で治療する仲間に届ける、結果を報告する。」

治療を始め、初期段階から副作用による下痢、肝機能数値の上昇、倦怠感等から、直ぐに薬の服用量を変える等ありましたが、現在も先生と相談しながら続けています。

治験を続けるうちに体は薬に順応しだし、改善効果が表れてきました。採血の結果に加え、CT撮影結果も何処に肺腺癌の影が有ったのか無理やり計測するほどだったようで、「影の輪郭が分かる程度だよ。」と診察毎に伝えられるまでに状態が安定してきました。不安な、心配したコロナ禍を超えて、風邪をひいたり、時期となれば花粉症を経験し、明らかに自分は普通に戻って来ていると感じるこの数年です。

先月、瀬戸先生から治験薬が厚生労働省から認められ、ようやく同じ病気で闘う仲間にも提供出来るようになったこと、治験薬が番号では無く商品名（名前の由来を含め）がついたことを教えていただき、嬉しく思います。

まだ、生まれたばかりのこの薬ですが、先生方、治験コーディネーターさん、本当に有難うございました。

九州がんセンターなどで開始された第1相試験から承認薬が誕生しました。広島の病院の先生から「呼吸器腫瘍の先生で一番の先生が居るから。」と瀬戸先生を紹介され、後を押されて転院してきました。12年経過して、新しいお薬の治験に参加し、「実験台になっても良いから仲間に薬を届けたい。」という願いが叶い、とても感無量です。

短いけど おわり。